

憤懣的荒廢への断片

富田 惣七

その家々のやぶれた縁には“ヒルガオ”のつるが、一寸ひっぱったくらいでは切れそうにもない強さで這いまわっている。

長三角状の葉は互生して、その脇には、忘れずに一個ずつのつぼみを用意している。

炭鉱が廃山になり、半ば倒壊した家々が風雨に晒らされているのである。

人々はそれを荒廢と呼ぶ。

きのうまでは路傍の“のげし”を、折ると苦味のある白い汁を出すけれども、ウサギに喰べさせるのだと言って子供たちがつんでいった楽しげな光景があった。

その道端は、きょうセメントで塗りがためられて、その上を排気ガスをふり撒きながらマイカーが走る。

人はしかし、それを“荒廢”とは呼ばない。

観に行くために切り開いた新しい道が、その観に行くものをも崩壊させている事を知っていながら、今人がきて、その人達が落していく金の方に眼を向けている。

日本人のこの自分で自分の首をしめる所業は、何時果てるのであろうか。

埼玉県の花となっている“サクラソウ”の大群落のあった田島ヶ原が、ゴルフ場と化してしまっただけの話や、“エビネ”で足を踏み入れることも出来なかった山が平らに削りとられて分壊地と化してしまい、しかもその分壊地が買い手のないまただの原っぱになっているという話は、今日ではもう日本全土に起っている喜劇的な悲劇の、ほんの一つの例に過ぎなくなってしまった。

伊豆の御蔵島のように月一回しか定期船が立ち寄らない島にだけ“カキラン”や“コイワザクラ”が心配のない息づかいで生きている。

このようにして何もかもが、何ものかに化してしまいつつある。この事を恐ろしい事だと感じない日本人のキョロキョロと右往左往する姿は、何時頃から日本人の体質となったのであろうか。

私たちの一番身近な足羽山にしても決してその例外ではない。

それもまた少しずつ亡んでいく姿として今私たちの眼の前にある。

“イワカガミ”の群生していた一帯のまん中を舗装した車道が走り、その横に、その草々を堀りおこして駐車場を作ったり家を建てたりしている。

すがすがとした山の冷気はついに完全に消え去ってしまった。

人間のみすぼらしい浅知恵だけが残っている。

私はあの辺りを通るたびに、悲しさを越えた憤りをおぼえる。

むかしの山と比べると、今のこの山は、やはり“ 荒廃の山 ”として私の眼には映る。

草霞み水に声なき日ぐれ哉 蕪村

このような情景を日本が失ったことは、日本人が日本の心を失ったという事だ。

金慾にかられて日本全土をふきあれたあのもくろみが、物で豊かさを計ろうとした日本人の感覚に油をそそいだ。

日本人もずいぶんと程度のわるい人間になったものだ。

枯草に尚さまさまの姿あり 虚子

自然と人間が一体になる。というよりも人間もまた自然の中の一物なのだ、という心、そういうものが、所謂豊かさというものではないか。

おれを自然の中に投げこんで、一本の草と同席して、はればれと空の青の眼にしみるのを感じるとき、人間は本当の豊かさにゆき会うのだ。

その時、一くきの野末の草の葉が、人間にとって偉大な意味をもつのである。

地球が一つの土塊と化し、ありとある生物が逼塞してしまったのでは、博物学もへったくれもない。

何をすべきなのか。学問とは何をすることなのか。本当の意味で今それが問い直されねばならない。

学問は、現実を直視している人間としての思考と行動の中にあるのではないか。

(福井女子高等学校)